



表紙

巻頭ロングインタビュー：高谷部二郎	
2	ホルヘ・カルドーソ
13	新・原簿のアーティストと 玉置嘉弘 高谷部二郎 (ギタリスト)
14	クラブ・マリプエロ「今日も元気、ギターが楽しい」 高 高谷部二郎・知子 (ギタリスト)
29	特別寄稿：藤澤真 偉大なるギタリスト小原宏正の軌跡～没後20周年
30	特別インタビュー：玉置嘉弘 ホム・ヒーオン (ギター製作者)
33	夏の読書レポート スペイン王立音楽院基礎講座 レポート 西住洋太郎 第4回 資料科高森サースクール レポート 三上山由貴 高田基也
Great Guitarist Showcase	
18	ハンス・ターマン (弦楽器修理工) リュート製作者の家族、ヴァイス家 (弦)
22	加藤チヤによる「フライング・ジュエリー」 (弦) 高 知子 フェルナンド・ソルの生涯 (巻終章)
Music Notes	
ギタールグムのためのレポート 「ギタールの歴史」 (巻頭) 高谷部二郎、高田基也、加藤洋太郎 高田一彦、高田基也、高田基也	
Book Review	
38	竹内永和のクール・アレンジメント 巻 イン・ザ・ランド・オブ・ザ・フュー・アレンジャー
39	最新巻の最新エッセイと巻頭講座 巻頭講座 巻頭の巻頭「次世代」 高田基也
40	21世紀のギター教本 2 (巻頭) 高田基也 レッスン1-3
44	テクニク習得ギターのツボ音 (巻頭) 高田基也 ホム (巻頭)
47	ソロギタールのためのシンプル・アレンジ講座 (巻頭) 高田基也
50	ヴァイラ = ロボス作品の技巧分析と解釈 (巻頭) アキラ・カサハラ (巻頭) 高田基也
80	ギタリスト紹介 (巻頭) 高田基也
88	サークル紹介 (巻頭) 高田基也 特別寄稿 高田基也 (巻頭) 高田基也
94	トビックス
98	巻頭のCD 高田基也
98	コンサートレポート
98	コンサートガイド
98	本誌ギター教室 テーブル・ガイド
100	刊行 CD 高田基也

メイン目次

今回の巻頭インタビューは、あの「ミロンガ」を作曲したカルドーソ。正直、こんな今今の時代の人とは思っていませんでした。ピアソラ時代の人かとおもっていたら、1949年生まれということ、私より5つ上なだけ。さらに、彼は、医者免許も持っている人。いやあ、土着的なイメージが完全にぶっ飛びました。

【巻頭ロングインタビュー 抜粋・概要】 ホルヘ・カルドーソ

- アルゼンチンのミシオネス州で生まれた。イグアスの滝で有名なところです。ギターを弾ききっかけを聞かれるが、アルゼンチンではほとんどの人がギターを弾くし、週末のパーティでは必ずギターが弾かれて踊ったり歌ったりしていた。普通に自然にギターと接していた。
- 作曲も、だれにも習ったことはない。いつの間にかに作曲するようになった。逆に、作曲というのは誰かに習ったり教えたりするものでないと思っている。
- 医師免許を持っているのは父の勧めだったから。結局は、医師の道は捨てて音楽の世界に入った。ただ、医学の知識はギター演奏にとっても役立っている。ギター演奏において、筋肉や骨格の構造を理解し、脳と神経の関係も無視できないものがある。だから、自分の体を使って、より効率的にギター演奏をするための人体実験をしてきたというようなものだ。
- 演奏する時に足台を使ったことは一度もない。常にストラップを使っての立奏で、コンチェルトの時もオーケストラパートに向き合えてコンタクトを取りやすいし、生き生きとした表現ができるようになる。
- 私たちが教わってきた音楽は、19世紀初頭以降の市民革命で勝った人達、つまりは音楽的教養のない人たちに理解できるように体系づけられたものだ。そのことを理解せず、バッハやヴィゼーを弾いているギタリストばかりということには滑稽さを通り越して寒々しくなっていく。もっと、古楽の知識があるギタリストが増えなければいけないと思っている。
- 南米の音楽についても、楽譜通りに弾けばいいと思っているギタリストが多い。本当のリズムやイントネーションは楽譜には書き表せないものだ。これを教えるのが私の役目だと思っている。
- 私は、タンゴは好きでない。アルゼンチンというとタンゴといわれるが、タンゴはブエノスアイレスだけの音楽でアルゼンチンの音楽ではない。また、タンゴを好きになれない理由の一つに、タンゴという音楽のテーマがいつも同じだということもある。すべて「私のもとから女が去っていった」という喪失感、いつもタンゴは恋人を失った男、つまり「寝取られ男」の音楽なんだ。唯一違うのは、ピアソラの「アディオス・ノニーノ」だ。だからこれだけは私も弾いている。
- 人類初の音楽家は作曲家であったはずで、その作曲は即興演奏によるものだと思う。そう考えると作曲

と演奏が分離しているのはごく最近に始まった特別な現象に過ぎないと思っている。私には、とても不自然に思える。まるで、言葉は話せるのに詩を書けないようなものだ。

- 30年ほど前に、ビウエラやバロックギターのいろいろな文献、楽譜や教則本に目を通してみた。そこに書いてあることは、彼らが最初に義務付けているものは、リズムに合わせてコードをかき鳴らし、あらゆるパターンの和声進行と様式を覚えることなんだ。それを知って、当時の音楽の基本がわかった。
- 音楽とは、「コミュニケーションしたいという欲求を、空気を道具として使うことによって満たす」いいかえれば、「音楽とは、人類が最初に手にした道具である」と思う。だから、私たち誰もが生まれたときに感じた「衝動」、「内的必然性」を忘れて演奏してはいけない。それを忘れたら、いくら上手に楽器を弾きこなしても、その演奏はうつろなものにしかならないと思う。
- その意味で、バリオスの「大聖堂」の3楽章は、指定はアレグロだけどプレストで弾く演奏家が多いのは問題だ。「大聖堂」の3楽章は、早く弾けば弾くほど曲の持つ世界から遠ざかっていく。むしろ、指定より遅めのテンポで弾いた方が曲の本質に近づけられると思う。
- 人生で影響を受けた作曲家にワーグナーがいる。彼の作品には「謎」がある。第一級の芸術作品にはかならず「謎」がある。その「謎」が深ければ深いほどその作品にのめり込む。その「謎」を解こうとする中で私たちは何かを得る。解くことのできない「謎」があると、その作品に触れるたびにその作品は見せる顔を変え、私たちに何かを与えてくれる。バッハもそうだ。
- 録音技術の発明、情報量の飛躍的な増加は、本物に触れる機会も増す。音楽は道具だといったが、道具であるからには、それをうまく使いこなさなければいけない。かつ、それが内的必然性から行われる行為であることが本物の音楽の条件だと思う。
- 他人の作品を弾くときは、その内的必然性に自分の内的必然性が共鳴しなければならない。しかし、他人の内的必然性が起こったきっかけまでは必ずしもわからない。それは情報して得てもダメだ。そして、私を作曲に駆り立てるのは、その楽譜に書き表せない部分なのだ。
- 生の演奏会は、その会場の空気を振動させて空間を音で満たす。家で聴く音楽とは間違いなく違った価値で見せられていくようになると思う。
- クラシックギター界がより広まるにはという質問を受けてまず頭に浮かぶのは、なぜコンサートでみな同じ曲ばかり弾くのだろうということだ。ギターのレパートリーはルネサンスから南米音楽まで膨大な作品があるのに、演奏会で弾かれるのは、レゴンディがはやればレゴンディばかり。これは、ギタリストの持つコンプレックスの表れだと思う。ピアノやヴァイオリンのここ200年の歴史にくらべ、表現力や機能が劣っていると感じて、必死でその仲間入りをしようとしてもがいているように思える。自信がないからもっと権威に認められたがっている。そんな音楽家に何が表現できるのだろうか。そんなジャンルが、よりポピュラーになれるのか。ギタリストの大半がコンプレックスを抱え、同じコンプレックスを抱えた聴衆を刺激しているだけのように見える。「私たちは、こんなに正統なクラシック音楽に近づきました」ってね。これは不毛なことだ。私たちは、この出口のない輪をぐるぐる回るのでなく、己の価値を発見し、ルネサンスから現代案での作品をきちんと見直して、きちんと取り組み、その価値を見いだして表現していくべきです。そうすれば、**ロマン派以降200年も停滞している西洋音楽の世界をギターが一新する**ということも決して夢でないと思う。

何と言いましようか、衝撃的で、知的で、とても内容あふれるインタビュー記事でした。書き綴ったら、ほど2ページ使い切りました。残りは、後半に続くということで。カルドーソさん、すごい!!!